

日本道教学会第六十七回大会案内

拝啓 仲秋の候 ますますご清祥のことと拝察申し上げます。

本学会第六十七回大会を来たる十一月十二日（土）に京都大学において開催いたしますので、
ご参加くださいますようご案内申し上げます。

ご参加の方は、同封の郵便振替票をご使用になり、必要事項をご記入の上、十月二十八日（金）
までに参加費等をお振込ください。また振替受領証は当日ご持参ください。

敬具

平成二十八年九月三十日

日本道教学会

会長

大形 徹

第六十七回大会準備委員長

宇佐美文理

会員各位

○日程表

日	時間	行事	会場
11日 (金)	15:00 ~ 17:00	全国理事会 合同役員会	人文科学研究所 本館 四階大会議室
12日 (土)	9:00 ~	受付	文学研究科 第三講義室
	9:20 ~	開会式	
	9:30 ~ 12:00	研究発表	
	12:00 ~ 13:00	記念撮影 昼食	時計台前 (写真撮影)
	13:00 ~ 15:00	研究発表	文学研究科 第三講義室
	15:15 ~ 17:05	特別講演	
	17:10 ~	閉会式	
	17:20 ~ 18:20	総会	
18:30 ~ 20:30	懇親会	文学研究科 第一講義室	

■準備委員会本部 地下小会議室

■書店 地下大会議室

■休憩室、手荷物預かり所 第一講義室

○研究発表

		文学研究科 第三講義室
12日 (土)	9:30～10:00	姜 生
	10:00～10:30	垣内 智之
	10:30～11:00	金 志玳
	11:00～11:30	坂内 榮夫
	11:30～12:00	加藤 千恵
	昼休憩	
	13:00～13:30	野村 英登
	13:30～14:00	谷口 綾
	14:00～14:30	頼 思好
	14:30～15:00	松家 裕子

○会費

大会参加費 1,500 円
懇親会費 5,500 円 (学生 2,500 円)

郵便振替口座 00930-4-236364

加入者名 日本道教学会第六十七回大会準備委員会

※出欠葉書は同封しておりませんので、ご参会の方は事前振込にご協力ください。

○記念写真 (1,000 円) は午前の発表が終わり次第、時計台南側にて撮影します。希望された方はその時間に時計台南側にお集まりください。

○昼食

弁当 (1,000 円) をご注文いただくか、カンフォーラ (11:00～15:00) もしくは西部構内の生協食堂、周辺の飲食店などをご利用ください。弁当は、休憩室 (第一講義室) にてお渡しします。(休憩室でお召し上がりください。)

第六十七回大会日程次第

受付（九時）

午前の部

開会式（九時二〇分）

挨拶

日本道教学会会長 大形 徹

大会準備委員長 宇佐美文理

研究発表（九時三〇分～二時）

張道陵以前儒生的道教

姜 生（四川大学）

司会 三浦 國雄（四川大学）

『大洞真経』の再検討

垣内 智之（大阪市立大学）

司会 亀田 勝見（福井県立大学）

道教の傳經儀禮における臨壇三師について

金 志玪 (ソウル大学)

司会 小南 一郎 (泉屋博古館)

『莊子口義』と禪について

坂内 榮夫 (岐阜大学)

司会 中西 久味 (新潟大学名誉教授)

鉛汞小考

加藤 千恵 (立教大学)

司会 都築 晶子 (龍谷大学名誉教授)

休憩 (二時〜二三時)

記念写真撮影、昼食

午後の部

研究発表（二三時～一五時）

内丹と築壇——翁葆光の『悟真篇』解釈とその展開

野村 英登（二松学舎大学）

司会 横手 裕（東京大学）

元代の医家と儒医——龍谷大学所蔵『家伝日用本草』をてがかりとして

谷口 綾（日本体育大学）

司会 武田 時昌（京都大学）

「墨床谷」から「雉衡山」へ——楊爾曾の道教系出版事業と明代女仙信仰

頼 思好（東京大学大学院）

司会 森 由利亜（早稲田大学）

「新宝巻」にみえる信仰のありかた——孤魂と免災——

松家 裕子（追手門学院大学）

司会 土屋 昌明（専修大学）

特別講演（二五時一五分～一六時〇五分）

『太乙金華宗旨』の浄明起源問題

—清初常州における呂祖壇信仰と浄明派の関係から

黎 志添

（香港中文大学道教文化研究センター長）

講師紹介 金 志珪（ソウル大学）

特別講演（二六時一五分～一七時〇五分）

三教論争から見た道教

麥谷 邦夫（京都大学名誉教授）

講師紹介 神塚 淑子（名古屋大学）

閉会式（二七時一〇分）

総 会（二七時二〇分～一八時二〇分）

懇親会（二八時三〇分～二〇時三〇分）

研究発表要旨

張道陵以前儒生的道教

姜 生（四川大学）

古人の信仰の姿は往々にして彼らの墓葬中に保存されている。漢墓は、画像石をはじめ全体として広大な神仙世界を構築しており、そこには「先に死し後に蛻す」という尸解成仙信仰が潜蔵している。前漢末期以来、儒生は、戦国期以来の死後における生命の変換を後押しする尸解信仰を受け入れ、春秋の大義と黄老道を援用してその思想的根柢とし、両者を有機的に結合させて新しい信仰体系を造り上げた。かくして、戦国秦漢の「形解銷化の術」は、「志士仁人」が死後に「得道成仙」という信仰へと発展していった。こうして、漢初の「陰陽の大順に因り、儒墨の善を采る」（論六家要指）と云う所の「道者」の集団的神仙信仰は、儒家道德の規範と融合して儒生の道教となつて両漢社会に盛行し、同時にそれが墓葬中に体现されたのである。

尸解信仰に基づく漢墓の画像は、忠孝節義や英雄主義を謳い上げている。漢儒は古来の聖賢、忠孝、節義、英雄を選んで仙とし、仙譜によって階層づけた。そこに漢代社会の理想が強烈に反映されている。子路などは、西王母のもっとも早期の配神にさえ選ばれている。

「先死后蜕」の信仰の仕組みは、漢代の鬼を「希望のある鬼」にした。気の本体論に依拠する漢代の宇宙観と生命観は、すべての漢墓を地下世界において死者の魂と魄とが再び結合して「復形」が実現される特異な時空に変えた。漢代人の信仰思想によれば、墓室は「煉形の宮」であり、死者は墓中での「太陰煉形」を経て「尸解仙」となる。漢墓中に出現した多数の神格と仙真是、死者の煉仙過程に根拠を与え、死者が仙人の仲間入りをすることを保障した。

漢墓から出現した大量の天倉と庖厨の画面は、「鬼もなお食を求める」という古い思想がここでは新しい高みに到達したことを表している。漢墓中、鬼に供される飲食物はすでに変化して、神仙だけでなく、すべての死者が享受できる仙菓の玉液瓊漿となった。

このように馬王堆漢墓のT形帛画と棺飾から後漢墓中の各種の画像に至るまで、のちの道教信仰の内実がすべて具わっているが、それと同時に、漢墓画像中には強烈な「中国」優越観念が含まれていることも指摘しておきたい。

漢から唐に至る千年間の最も貴重な思想的財産はまさしくここにこそ存在する。かつての文化的断裂や観念の阻隔によって、漢代の思想的遺産には誤解され忘れ去られたものも少なくない。今日、大量に出土した漢墓の画像資料と文献資料を基礎とし、それを補助するに伝世史料と早期道教文献をもつてした上で、宗教研究の視角と方法によって、「大道に合す」(司馬談「論六家要指」)ことを最高の目標にした両漢の神仙信仰の内実、すなわち、張道陵以前の「道」を最高の信仰対象とする宗教形態をあらためて検討することがすでに可能となっている。

『大洞真経』の再検討

垣内 智之（大阪市立大学）

興寧二年（二六四）、許氏父子と靈媒楊羲のもとに南嶽夫人魏華存をはじめとする真霊たちが降臨し、その口授を通じて上清経が開示されるようになる。その後、王靈期による造作なども経ながら、上清経典群と呼ぶべき一群の経典群が形成されるに至るのだが、上清経開示のきっかけを作った魏華存は『大洞真経』の読誦によって昇仙を成し遂げた人物であるとする伝説（晋紫虚元君領上真司命南嶽夫人魏夫人仙壇碑銘）に端的に表れているとおり、『大洞真経』が上清経典群のなかで特別な位置を占めるという観念は、ひろく共有されていたと考えてよいだろう。

そもそも経は、本来、天界に蔵されているのであって、何らかの契機によって少しずつ人間界にもたらされるときに現れていた。『真誥』巻五「道授」には数十点の経名が列挙される一方、「在世」と注記されるものがわずかに数例にとどまるのも、こうした観念を反映したものとと言える。そうしたなか、『大洞真経』が数少ない「在世」の経に数えられているという事実は、該経が早い時期に書物としての実体を備えていたことを示唆している。しかも、『大洞真経』の読誦による昇仙という伝説が流布したことを考え合わせれば、それは読誦するに相応しい形式の経であったと考えるのが自然である。

しかしながら、一般にその系譜を引くと考えられる道蔵所収の『上清大洞真経』にせよ、『大洞玉経』にせよ、一部が韻文で構成されてはいるものの、全体の構成は複雑で、およそ読誦するには不向きなものに見える。しかも、韻文の周囲には、神々の名が鏤められた散文が置かれているが、そこには他の多くの上清経の成書を待たねば説き得ない内容が多く含まれており、少なくとも道蔵所収のものについて言えば、その成書時期は、情報源となった他の上清経の成書より明らかに後れると判断されるのである。

つまり、現行本は、魏華存が読誦したものとして尊崇されたであろう〈原初の『大洞真経』〉とは、内容面で大きな断絶を有していると言わざるを得ないのである。〈原初の『大洞真経』〉は果たして実在したのか。実在したとするならば、それは如何なる内容をもつものであり、その痕跡はどこに見いだし得るのか。そして、現行本のような体裁のものが『大洞真経』として道蔵に組み入れられるに至ったのはなぜなのか。こうした疑問に向き合うために、先行研究の成果を踏まえながら、まずは基本的な確認作業を通じて、発表者なりに周辺資料を辿り直して整理してみたいと思う。

道教の傳經儀禮における臨壇三師について

金 志玪（ソウル大学）

本発表では道教の體系化と經典の傳授儀禮の問題を取り上げる。道教が佛教をカウンターパートとして意識しながら様々な儀禮を整備していったことはよく知られている。かかる道教儀禮について、單なる佛教儀禮の模倣とみるのではなく、道教的特色がどこにあるのかを再考する必要がある。それは道佛交渉史を理解する上でも、また中國の宗教文化を理解する上でも重要な問題と考えられる。

六朝時代の中國佛教において受戒儀式の定立が重要な問題であったのに対し、道教においては經典傳授の儀禮が發達した。そのような傳經の儀禮化とともに「師」の役割は多様に分化し、經典傳授において、二種類の「三師」が成立した。その一つは、傳授される經典の權威と正統性を担保する傳授系譜上の三師、すなわち經師・籍師・度師の三師である。これについては嘗て考察を行ったことがある。本発表ではもう一つの三師の問題を扱う。それは經典が傳授される儀禮の場において壇上に登る「臨壇三師」、すなわち保舉・監度・度師である。

一〇二五年、北宋真宗の皇后、章獻皇后が行った受籙儀禮の記録には、道壇に臨んで儀禮を執り行った臨壇保舉・臨壇監度・臨壇度師の三人の姓名が明記されている。授籙や傳經の際に壇に臨む三師をたてる規定はいつから始まった

ものか。臨壇三師は、佛教の受戒儀式における三師（和上・阿闍利・教師）に對應するようにみえるが、佛教のそれと完全に一致はしない。したがって、三師の規定がいつはじまったかは、「保舉」・「監度」がそれぞれどのような淵源を持っているのかを説明することによって明らかになると思われる。

本発表では、道教の臨壇三師の淵源が四世紀末～五世紀の道教經典にあることを明らかにし、歴史上「臨壇三師」が傳經儀式に立てられた實例と、「臨壇三師」に關する科儀文獻の検討を通じて、傳經儀禮における三師の役割について考察する。

「臨壇三師」のなかの「保舉」は、上清經の母胎であった内傳類において、仙人となる人物を「保證する神仙」を意味する。これは、六朝の官僚推薦制度にある「薦舉の保證人」觀念を取り入れたものである。「監度」は、上清經や靈寶經において道教修行者を監察する神仙を意味する。

壇に登る「三師」の規定を定めたのは劉宋の陸修靜であり、三師の名は傳經の證人として經典とともに傳授された。現在の道藏のなかにもその痕跡をみることができ。臨壇三師をたてて授録した歴史的な実例としては、七七一年金仙・玉真公主の受度の際に史崇が「臨壇大德証法三師」の一人としてたてられたことがあげられる。要するに、五世紀以降、道教において、儀禮の空間として「壇」が重視され、傳經の儀禮に三師が実際に機能したことが確認されるのである。

『莊子口義』と禪について

坂内 榮夫（岐阜大学）

従来から禪思想の形成に老莊思想との思想的関連性が指摘されてきた。即ち、「不立文字」や「以心傳心」「見性成佛」などの禪的思想の形成には、老莊思想の存在とその影響が考えられるだろうと言うものである。たしかに、禪的思想の成立にあたっての老莊思想の存在と影響は、おそらくは否定できないものがあるだろう。しかし、老莊思想と禪の關係を通時的に考えてみるに、奇妙なことであるが、禪宗が確立し體制の中に組み込まれてきた宋代以降になると、今度は逆に莊子が禪と同じものであるとか、莊子の中に禪的な思想を見ようとすると態度が見えてくるように思われる。朱子の次のような發言は象徴的であろう。

蔡（季通）「先に先生が『庚桑子』の一篇はすべてが禪である。」とおっしゃるのを聞きましたが、今讀んでみると、果たしてそうでした。」

朱子「その他にも禪風の話はあるのだが、ただこの一篇は始めから終わりまで禪の話のみなのだ。」（『朱子語類』卷一二五「老莊列子」）

このような『莊子』を禪に引きつけて解釋する（「以禪解莊」）態度の著しい注釋書の最も初期の例と考えられるのが、南宋 林希逸『莊子膚齋口義』であると思われる。今回の發表では、『莊子膚齋口義』を一つの實例として『莊子』に見えるどのような思考が禪と同一視されたのかについて考え、『莊子』と禪の親近性とその相違について少し考えて見たい。

付記

『朱子語類』については、以下の書を参考にした。

『朱子語類』譯注 卷二二五 山田 俊譯 汲古書院 二〇一三

鉛汞小考

加藤 千恵 (立教大学)

『周易參同契』は後漢の魏伯陽の作といわれるが、それが事実だとするならば、成立してから数百年間、ほとんど誰にも顧みられなかったこの書物が、唐代になると、一転して脚光を浴びるようになったのはなぜか。この問題を考えるうちに浮かび上がってきたのが、煉丹術における代表的な薬材である鉛と汞（水銀）がどのようにとらえられてきたのか、という問題である。さらにこれらの問題は煉丹術の成立と変遷を読み解く鍵となる可能性を指摘したい。

鉛と汞を混ぜ合わせて丹薬を煉る方法は、すでに『抱朴子』黄白篇に見え、それ以降の煉丹術書にも散見される。また、唐代には実際に鉛と汞を混ぜ合わせた丹薬が服用され、鉛汞の語は煉丹術の代名詞のように使われていたようである（韓愈「故太学博士李君墓誌銘」、白居易「思旧」など）。唐代以前の煉丹術（外丹）書に見える鉛と汞は、陰陽としての役割が意識されている文献もあるが、ほとんどの場合、鉛も汞も調査される複数の薬材のうちの一つでしかなく、その配合の比率もまちまちである。ところが、唐末以降に成立したいくつかの煉丹術（内丹および外丹）書においては、鉛と汞を象徴的な一对の陰陽の薬材として各八両ずつを合一させるという方法が見られる。この説は『周易參同契』中のいくつかの異なる要素を組み合わせて新たに構築したものと考えられる。

薬害の顕在化もあり、唐末になると外丹は下火になり、代わって内丹が隆盛の兆しを見せる。一方で、薬害によって揺らぎかけていた鉛と汞に対する信頼を取り戻すべく、外丹もまた新たに生まれ変わろうとしていたようである。その際に、内外丹とも『周易参同契』にその理論的根拠を見出し、理論の整備を謀ったのではないか。

『周易参同契』において、鉛と汞はそれぞれ重視されているものの、現存する本文にこの二つの鉱物の融合は説かれていない。ところが、唐代以降のいくつかの注は『周易参同契』の主旨を鉛と汞の交合としており、今日なお、それらの注による解釈が広く行われている。

内丹と外丹の影響関係については、はっきりしたことはわからないが、『周易参同契』に見える陰陽二薬と『黄庭経』に見える日月二気との関連性を示唆する文献もあることから（唐「日月元枢論」）、『周易参同契』の理論を受け入れる土台が整っていたのは、むしろ内丹の前身ともいえる六朝時代の存思・服気法であった可能性も考えられるだろう。

とくに宋代以降に成立した煉丹術（内丹および外丹）書には、『周易参同契』を換骨奪胎した理論を具えているものが多く見られる。北宋の『丹論訣旨心鑑』もそのような新しいタイプの外丹書の一つであるが、「薬を用いず五行を用いよ」と主張し、理論ばかりが説かれ、丹薬煉成の手順の説明はない。このような外丹説は、理論の構築が目的となり、もはや実践を旨とするものではなくなっていたのかもしれない。内丹か外丹かの区別のつかない経典が存在するのは、存思から内丹への転換点と、実践的外丹から理論的外丹への転換点とが、ほぼ重なり合っていたからではないだろうか。

内丹と築壇 — 翁葆光の『悟真篇』解釈とその展開

野村 英登（二松学舎大学）

『悟真篇』の代表的な注釈者である南宋の翁葆光は、内丹の煉成過程を「強兵戦勝之術」「富国安民之法」「神仙抱一之道」の三段階に分け、詩篇全体を統一的に解釈しようと試みており、その概要を注釈とは別に『紫陽真人悟真直指詳説三乘秘要』にまとめて述べている。翁葆光は張伯端が既存の修行法をおしなべて否定したのを踏襲し、特に金丹の材料を問題とした。「金石草木」のような大地から産出されるものや、「精神氣血」のような人体から採取できるものは、天地が生まれて以降にできた残りかすとして否定した。神仙のような永遠の存在になるためには、天地が生まれるよりも前に存在し、それ故にこの世界を生み出す力をもつ、先天の気を材料として金丹を煉成するしかない。翁葆光はその先天の気を体外から採取することを説いており、その方法が第一段階の「強兵戦勝之術」であった。翁葆光は「強兵戦勝之術」に關し、「夫れ此の金丹を煉ずるには、先ず名山福地を求め、次に丹室數椽を創る。壇築三層、劍卓四面。之に懸ぐるに鏡を以てす」と道壇を築いた上で、「毎に中秋初夜一陽動の時を以て、坐して魁罡を鎮め、壇升ること三級……、一時辰ならずして、立ちに金丹を獲て口に入る。戦勝の術著わるなり。」と、八月十五日の夜に道壇に登り、その場で金丹を煉成することだと説いている。

この翁葆光が説く内丹の煉成過程を詩と図で祖述した『金液還丹印證圖』という文献がある。同書の道藏本には注釈がないものの、別に明代の注釈が二つ残されている。その一つ、陸西星による『龍眉子金丹印証詩測疏』（蔵外道書卷五）では、築壇の制度は『許真人石函記』にもとづくとし、「蓋し古仙の修煉、天元大丹の制度なり」と結論する。『許真人石函記』は従来外丹の書として考えられてきたが、ここでは天元、天に金丹の材料を求める方法を説くもので、地元（外丹黄白術の類）とも人元（房中術や周天法の類）ともみなされていなかったことが分かる。陸西星よりも早くに活躍していた涵蟾子という人物の編纂による『諸真玄奥集成』（『金丹正理大全』に収録）には、彼自身が注釈した『金液還丹思金圖發微』が第五卷に、最終第九卷には『許真人石函記』が収録されている。つまり、この二つの文献は密接な関係にあると明代には考えられていた。許真人、許遜の信仰が南宋に盛んになったことはよく知られているが、『悟真篇注疏』の陳達靈序では、南宋の時代に悟真篇の継承により神仙と成る者が相次いで現れることを許遜が予言していたとし、翁葆光をその一人に数えている。

そこで本発表では、これらの諸文献によって翁葆光の築壇の技法が後代どのように解釈されたかを論じ、それを手がかりとして、彼の説く先天の一气の正体とその採取法の解明を試みたい。

元代の医家と儒医 — 龍谷大学所蔵『家伝日用本草』をてがかりとして

谷口 綾（日本体育大学）

龍谷大学の写字台文庫には、本願寺歴代宗主が蒐集し伝持した書籍が収められている。このうち、医薬・本草など自然科学分野の和漢籍については、一九九四年にはじまる古典籍調査でようやくその全容が明らかにされ、その成果は『龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録 自然科学之部』にまとめられている。

この中に、『家伝日用本草』という書籍がある。これは元代の医家・呉瑞なる人物が、当時の飲食物約五百四十余種の効能等を八巻にまとめたもので、元・天曆二年（一二三九）にはじめて刊行された。写字台のそれは、明・嘉靖四年（一五二五）に、呉瑞から七世代のちの子孫である呉鎮によって刊行された明版だが、元版が失われたいま、旧姿をとどめる国内外で唯一の8巻本であることが、かかる調査によって明らかにされている。

さて、この本草書が編まれた元時代、これを前後する十世紀から十四世紀は、中国医学史上で発展の画期とされ、その担い手である儒医の活動がつとに注目を集めてきた。この時期の儒医については、医学史や近世社会史の領域から多くの研究がなされ、その歴史的展開は、いまや総合的に把握することが可能となりつつある。

では、この時代の医家についてはどうであろうか。著名な医家に対してはこれまでにその著作や医学理論の分析が

進められ、近年では社会医療史の観点からひろく医家の動向や社会的影響を把握しようとする研究が目立つ。その代表的なものが、明清時代の医家を考察の対象とする梁其姿氏、邱仲麟氏、謝娟氏らの研究である。ここで注目したいのは、明代医家のルーツが宋々元代に多く求められるという見解である。これは同時に、近世医家の社会的基盤がこの時期に築かれたことを示しており、この見解は医家の軌跡をたどる上できわめて示唆に富む。

宋から金元にかけて、国家は民間や宗教者の医療を統括し、医療に対する新たな倫理観や制度を確立していった。『家伝日用本草』はこうした状況の中でまとめられ、のち明代半ばに再び一族の手で刊行された。近世医学の展開に医家がどのように対応し、また関与していたのか、本書成立から刊行にいたる背景を読み解くことは、当時の医家の実状を探ることに繋がる。

そこで本発表では、書誌学研究の成果に依りつつ、『家伝日用本草』の出版をめぐる状況を探り、本書の性格をいま一度整理し、呉瑞らの活動や一族の動向、彼らの社会的地位などの諸相を明らかにしたい。また、当時の医家と儒医との関係にも触れ、両者がどのように相互に関連し次代へ展開していくのか、こうした問題も併せて考えてみたい。

「墨床谷」から「雉衡山」へ——楊爾曾の道教系出版事業と明代女仙信仰

頼 思好（東京大学大学院）

明末の知識人である楊爾曾は、道教の中でも世俗傾向をとる浄明忠孝道の信徒であったが、同時に、儒商を生業とする知識人でもあり、『新鐫仙媛紀事』などいくつかの重要な道教系の書物を出版した。

万曆十八年、楊爾曾が最初に撰録した道教に関する作品である『狐媚叢談』が出版された。その序文には「墨床子」という号が見える。この時の印刷は、まだそれほど高い技術を用いていなかった。のち万曆三十年に出版された『仙媛紀事』と万曆三十一年に刊刻、三十二年に出版された『出像許真君浄明宗教録』は、その凶像に高名な黄家の版画技術を採用しており、徽派版画の重要な芸術作品と見なし得る。『仙媛紀事』の撰録時点から、「雉衡山」の号がしばしば用いられていた。その上、『仙媛紀事』を皮切りに、出版書物の質が向上する傾向が見て取れる。『仙媛紀事』は女仙伝記集の中で最も分量が多く、初めての挿絵入りのものである等、明代の出版文化や道教思想を考える上で注目すべき文献である。また、従来、道教の女仙伝記集などの神仙伝記は、道士によって執筆されるのが普通であるが、『仙媛紀事』は文人によって撰述・記録されている点に特徴がある。『出像許真君浄明宗教録』は浄明忠孝道の重要な書物であり、彼自身が許遜の弟子と称し、入道の逸話を記している。また、万曆二十七年に出版された『新鐫海内奇觀』には、道教

の神聖空間なども記され、広く流伝した。その後、十数年を経て、天啓三年に、壮年の楊氏は刊刻精美な『繡像韓湘子全傳』を出版した。その内容は道教の韓湘子が点化を受けた由来及び修行の過程を、いきいきと描き出すものであった。ここでは、「墨尿谷」と「雉衡山」という、「谷」と「山」を含む二つの空間名が記され、それぞれ違った寓意を象徴している。このような号と題材の変遷には、楊爾曾の人生の経歴、特に道教が彼にもたらした影響や、彼の信仰に対する思考の変化が反映されている。

楊爾曾の出版物のうち、『仙媛紀事』は女仙伝記史において新たな局面を作り出したが、今までほとんど研究されてこなかった書物である。本発表では、明代の女仙はそれ以前の時代とは異なる新たなイメージを切り開いたという視点に基づき、女仙を研究する上で必要不可欠な資料である『仙媛紀事』に着眼して、道教における女仙像の移り変わりについてクローズアップしてみる。さらに楊爾曾の道教系の出版事業、自称する号の変遷と、『仙媛紀事』の成書について検討する。そしてそれらを例として、明代の女仙信仰の一端を明らかにし、また道教系の書物を撰録・出版することに、仏教等も含む信仰における晚明独自の「通俗化」の雰囲気を示されていることを考察したい。

「新宝卷」にみえる信仰のありかた — 孤魂と免災 —

松家 裕子 (追手門学院大学)

宝卷は、物語りをうたい語る芸能あるいは宗教儀礼であるところの「宣卷」のテキストである。このジャンルは、明代に隆盛を見たのち、清に入って長く衰え、十九世紀後半、清の咸豊年間前後から再びテキストの生産が盛んになって、抄本・刊本・石印本など大量のテキストが生産された。これら清代後期以降の、澤田瑞穂のいわゆる「新宝卷」は、二十世紀後半、中華人民共和国の政策によってほとんど途絶えたかに見えたが、一九九〇年代よりその宣卷がふたたび盛んに行われはじめ、現在も中国の主として江南の農村に、民間の宝卷テキストが大量にそしてバラエティ豊かに流布しているところがある。わけでも浙江省紹興郊外農村地区で行われている宣卷は、物語りの前後に迎神、厄払い、送神などが行なわれ、宗教儀礼としてのかたちをよく保持して、宝卷というジャンルの社会的機能について、多くの情報を与えてくれる。

発表者は、磯部祐子さん(富山大学)の調査に同行させていただくかたちで、この紹興宣卷の実地調査を始め、すでに八年めになる。新宝卷における宗教の混濁と世俗化については、澤田瑞穂がつとに指摘している(『増補 宝卷の研究』国書刊行会、一九七五年、三十七-三十八頁)が、紹興宣卷における宗教的状况は、宣卷の場に祀られる神、物語

り中に登場する神とともに、予想をこえて錯綜していた。ひとつの宝巻において、太白金星が主人公を助け、観音菩薩が主人公を救い、玉皇大帝が悪玉に懲罰を与えることは、ごく一般的に見られる。また、その宣巻で招きよせられるのは、宝巻中に登場する神とはかぎらない。こうしたことについては、宣巻における信仰の弱化、世俗化に帰する人が多い。しかし、大量の新宝巻のテキストが生み出され、また、現在にいたるまで人々が高額の謝金を支払い、宣巻を行なっているには、それだけの理由があるはずである。

実地調査を重ねるうち、『太平玉巻』という宝巻に出会ったことを端緒として、紹興宣巻全体に「孤魂（横死した人の浮かばれぬ魂）を慰める」という機能があることがわかってきた。一方、宝巻の読み解き（文献調査）においても、儒仏道といった大きな宗教に焦点を当てると錯綜するように見えるものの、たとえば『惜穀宝巻』は、「勸善と免災」において終始一貫するなど、ひとつの信仰に支えられていると見てよい作品が少なくないことが明らかになりつつある。

本発表では、紹興宣巻の実地調査で得られた映像記録や民間のテキスト（の写真）を紹介しながら、新宝巻が、宗教的に錯綜しているようにみえながら、「孤魂の慰撫」あるいは「勸善と免災」といったいわば別種の信仰に支えられ、文学としても一定の価値を有する作品になっていることを、示したい。

『太乙金華宗旨』の浄明起源問題 — 清初常州における呂祖乩壇信仰と浄明派の関係から

黎 志添 (香港中文大学道教文化研究センター長)

『太乙金華宗旨』(以下は『金華宗旨』と略称)に対し、蔣予蒲は天仙派、閔一得は龍門派に属すると、それぞれ異なる主張をしていたが、この分岐は明らかに彼らが自身の流派を他から識別する必要からテキストを再構成した結果であり、再構成の論述も教派の教理によって異なる。森由利亜氏やモニカ・エスポジト氏はそれぞれの著作において『金華宗旨』祖本各種の再構成の歴史、及び各版本の編集・刊行の過程に生じた問題について論述した。論者が興味を持っているのは、乾隆四十年(一七七五)邵志琳本『金華宗旨』が浄明派に淵源を持つという問題である。

蔣予蒲と閔一得は、それぞれ編纂した版本において『金華宗旨』と浄明派との関係を故意に回避しているが、『金華宗旨』の原本にある乩示は、実際には康熙七年(一六六八)と三十一年(一六九二)、毗陵郡(江蘇常州府)の郡治武進城内(現在の常州市)において呂祖が降乩した二つの乩壇で起きたことが明白である。邵志琳本に付す十四篇の序と二点の附篇、及び一篇の跋文は、『金華宗旨』の編集者が浄明道を信奉したという宗教的事実を明示している。

森・エスポジト両氏はいずれも邵志琳本『金華宗旨』が浄明派に由来していることを指摘した。エスポジト氏は『金

『華宗旨』がもともと浄明運動の参加者に乱示したものであるということをもう一度強調したい」と述べ、森氏も同様に『金華宗旨』の編集者が浄明道を信奉したことに気づいた。しかし、両者の関係が一体どのようなものであったか、さらなる研究が必要である。事実上、エスポジト・森岡氏はまだ『金華宗旨』の浄明道由来の問題を解決していないからである。換言すれば、『金華宗旨』の研究を深めるためには、なぜ『金華宗旨』が浄明伝統の産物であるかという問題を再考すべきである。邵志琳の「序」は『金華宗旨』を「浄明大法、忠孝雷霆」の教義の下にあるとした。この点に注目して本稿では、浄明経の歴史と文献的実証、特に明末清初における浄明道の金丹修鍊に関する文献の検討を通じて、『金華宗旨』祖本がいかに浄明派の内丹修鍊伝統を継承したものであるかを解明したい。

第一部では、毗陵武進県にある潘易庵の白龍精舎の乩壇が浄明道の背景を持つことを考察する。邵志琳本『金華宗旨』において、潘易庵は大多数のメンバー（少なくとも七名の乩壇参加者）の導師である。彼らが白龍精舎の乩壇において、呂祖から得た降乩こそが、『金華宗旨』の起源となったのである。第二部では、潘静観が白龍精舎の乩壇において弟子に『浄明忠孝録』を伝授した事実を考慮し、『金華宗旨』の成立過程を明末清初の江西南昌及び江蘇地区（例えば南京・杭州・常州など）の縉紳階層の間で流行していた浄明伝統において再考察する。当時の縉紳は浄明経典の編纂・刊行および流通に力を注いだ。浄明道に属する文人たちが龍沙讖や内丹書を刊行した事蹟を調べると、晩明の浄明信仰が広範にわたって広がっていたことがわかる。このような事実を踏まえて、本稿では清初毗陵で刊行された『金華宗旨』祖本の背景を分析し、それが晩明清初に編集された浄明道の金丹伝統の延長とみなすべきであることを論証する。

特別講演

三教論争から見た道教

麥谷 邦夫（京都大学名誉教授）

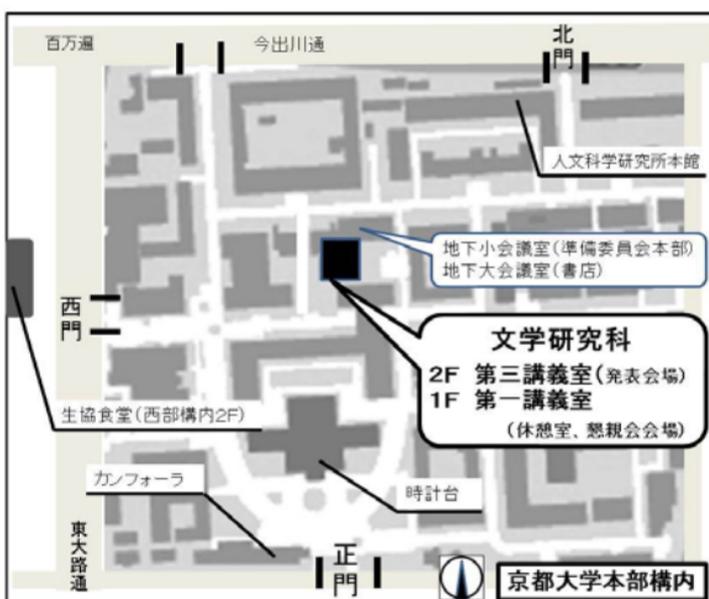
佛教流入以降の儒佛道三教間の論争は、さまざまなテーマをめぐって繰り返行われてきた。とりわけ南北朝後半から唐代にかけては、道教教理の展開に對應するかたちで、道佛二教間で激しい論争が戦わされた。これらの論争を記録した現存資料は、その大部分が佛教側の護教的觀點からする道教批判を集成したものであり、論争の結果は往々道教側の敗北に終わったことになっている。偽濫僧や佛寺の過度な造營などをめぐる財政經濟問題などでは、佛教側もかなりの痛手を蒙ってはいるが、こと道佛二教間の教義論争に關していえば、佛教宗派間での長い論争の歴史や講經といった教義宣明のための制度を有し、宗論を戦わせるための論理學的基礎を身につけていた佛教側がいささか有利であったことは否めないであろう。

こうした状況を打開するために、道教の宗師たちの中にも佛教の辯論方法を積極的に研究して對抗しようとするものが存在した。『道教義樞』の序文にあげられた「王家八竝」の王家すなわち王斌は、齊梁の間の道教宗師としてその代表的存在に擧げることができよう。また、近年の研究によれば、辯論方法を訓練するための教科書的なものも存在

していたことが知られる。ただし、こうした努力の痕跡は、唐代以降になるとほぼ姿を消してしまふ。このことは、佛教における三論學派の衰退とも關連すると思われるが、道佛論争そのものの低調化も原因のひとつであろう。

いずれにしても、佛教側との教義をめぐる論争の過程を通じて、道教の宗師たちは論争のための辯論方法そのものを學ぶとともに、自己の教理の弱點を明確に自覺し、その弱點をいかにして補強するかを眞劍に模索していった。教主の有無をめぐる論争、道と氣、道と自然の關係如何をめぐる論争、天尊をはじめとする天神をめぐる論争などは、いずれも道教教理の核心に關わるものであるが、激しい教義論争を経て道教側の主張の一部は次第に變化していった。この時代とりわけ隋唐時期の道教教理は、『老子』の哲學を核に展開すると同時に、佛教との論争を糧として飛躍的な發展を遂げたといつても過言ではない。

『辯正論』や『廣弘明集』といった代表的三教論衡書をはじめとして、これまであまり注目されてこなかったその他の關連史料を検討することによつて、六朝から隋唐時代にかけての道教が抱えていた教義上の問題點を明かにするとともに、當時の道教の宗師たちがそれらを解決するためにいかなる思想的營爲を積み重ねてきたのかの一端を述べてみたい。



① JR京都駅から

- ・市バス 206 系統「祇園・北大路バスターミナル行」
京大正門前または百万遍下車 (約 35 分)
- ・市バス 17 系統「四条河原町・銀閣寺行」
百万遍下車 (約 35 分)

②京阪出町柳駅から

- ・東へ徒歩 (約 15 分)



善本の展示について

大会当日、京都大学百周年時計台記念館の企画展示室において、「京都大学所蔵道教文献善本展示」を行っております。

展示期間 11月8日(火)～13日(日)
9時30分から17時まで

展示品リスト

- ※「正統道蔵」(附属図書館)
 - ※「老荘列三子通義」(文学研究科)
 - ※「南華真経」(文学研究科)
 - ※「三教源流聖帝佛師搜神大全」(文学研究科)
- その他数点の予定です。